名桜大学紀要，(26)：121-124（2021）

【実践報告】

コロナ・パンデミック期におけるタイ王国NGOとの協働による ICT活用授業の試み

―― 看護学生が国際看護を学ぶために ――

金子　有希，横川　裕美子，森本　薫子，Sriwan Arsasri

Utilizing ICT in the Classroom in Collaboration with a Thai NGO during the Coronavirus Pandemic

―― A Trial with Nursing Students Studying International Nursing ――

KANEKO Aki, YOKOGAWA Yumiko, MORIMOTO Kaoru, SRIWAN Arsasri

Ⅰ．はじめに

人間健康学部看護学科の国際看護学Ⅱは，毎年６月から事前学習を開始し８月に集中講義，９月前半にタイ王国東北部農村地域で海外研修を実施している。この科目は２年次から４年次までに選択できる専門科目であるが，例年６～16名ほどの学生が受講している。

しかし本年度は，新型コロナウイルス感染症の世界的流行（以下，コロナ・パンデミック）により全学的に渡航禁止となり，閉講となった。コロナ・パンデミックの収束は未だ不透明である。

現２年次生が次年度に３年次に進級しても，海外研修が実施できるか定かではないため，その代替となる研修方法も模索する必要がある。

そこで本年度は，国際看護の基礎を学ぶ国際看護学Ⅰの中で，タイ王国NGOと協働でICTを活用した授業を試行した。この科目は２年次の必修科目であるため，全員がICTによる海外との通信を経験することが出来た。

本稿では，ICT活用により海外のNGOスタッフから直接講義を受けることが可能となった授業の実際と課題について報告する。

Ⅱ．国際看護学Ⅰの概要と目標

１．科目の概要

国際看護・異文化看護の基本的な考え方を学ぶとともに，国際協力活動の事例をとおして，人々の生活に深く根ざしている文化背景を理解して尊重する健康支援や看護のありかたについて学ぶ。

２．目標

１）人々の社会背景や文化背景を理解して保健活動や看護援助を行うために必要な基礎的知識を習得することができる。

２）国内・国外での国際協力活動の実際を知り，文化を尊重した保健活動や看護のありかたを考察できる。

３．科目シラバスと授業の位置付け（表１）

国際看護学Ⅰの構成は，①国際看護・異文化看護の概念，②在日外国人に対する医療や看護のサポート，③国際協力・国際保健の３部構成となっている。授業回数は全10回で，海外NGOと協働での授業は，第９回に実施した。

表１　国際看護学Ⅱのシラバス（一部抜粋）

第１回	シラバス説明、国際看護・異文化看護の概念 日本の看護職による国際協力活動の歴史と変遷
第２回	日本に在住する外国人の医療や看護のサポート①
第３回	日本に在住する外国人の医療や看護のサポート②
第４回	文化背景を尊重した看護ケア理論
第５回	異文化体験シミュレーション
第６回	国際協力を経験した看護職の活動報告（JOCV-OG看護師）
第７回	日本のNGOによる国際協力
第８回	世界の保健医療の現状と国際協力機関の活動
第９回	開発途上国におけるNGOの活動（タイ王国・HSF）
第10回	終了テスト

Ⅲ．授業の実際と学生の学び

１．授業の実施状況

国際看護学Ⅰは５月12日に開講した。開講時は本学の新型コロナウイルス感染予防対策に沿って，対面式とオンラインによる遠隔式を併用して授業を実施した。

開講当初は，遠隔で受講する学生が約７割であった。しかし第９回の受講者の比率は，対面での参加３：遠隔参加１と逆転した。

対面で講義を受けた学生は，タイNGOスタッフからの講義を，講義室のスクリーンに映し出されたteamsを通して受けているが，遠隔で講義を受けた学生は，大学教員とタイNGOとの２方向からの講義を，パソコンやスマートフォンで１つの画面によって受ける形になった。

第９回の授業を実施するにあたっての事前準備としては，現地タイ側のWi-fi環境の安定性が図りきれずネットワークトラブルも懸念されていたため，本学メディアネットワークセンター（以下MNC）の保守員に同席してもらい，ネットワークの中断に備えた。

次に講義の内容については，前半に科目担当教員よりタイ王国の基本情報を学生に講義した。次にteamsに参加していたタイ王国のNGO Health and SHARE Foundation（以下，HSFとする）に交代した。HSFからは，スライドを共有し現地コーディネーターの通訳を通して，以下の内容について講義が行われた。

① 対象者が社会的に不利な立場にある人々，貧困層の女性や，親がいない，あるいは虐待を受けた子ども，移民，HIV/AIDS，LGBTQで支援が必要な人たちであること。

② ３つの活動として，権利獲得のサポートと，医療機関へのアクセスが難しい人々が医療を受けることが出来るようにするためのモバイルヘルスケア，ラーニングセンターによる啓蒙活動があること。

上記は，2019年度の国際看護学Ⅱにおけるタイ国東北部農村部での海外研修の中盤での研修内容に相当する。

２．授業に対する学生・HSFからの反応

当日に受講した学生の反応を所感からいくつか抜粋する。

「私もタイでの海外研修に参加したかったのでこの機会に学ぶことができてよかったです。とても勉強になりました。」

「タイの取り組みや問題，状況を知ることができ世界に目を向けることで視野が広げることができて，とても良い講義になりました。」

「『すべての人に健康でいる権利があるという，“すべての人”の対象の範囲はこんなに広くていいんだ』，『本当にみんなが健康を目指すことができる将来が近づいているな』と感じた。国際看護の講義を受けてきて，世界には自分の知らないいろんな看護がたくさんあるのだと知ることができ，受ける前と後では確実に見ている世界が広がったと感じる。実際に世界の様々な場所へ行けなくても，世界の広がりを実感することができ，学ぶということの凄さや素晴らしさを感じた。

「自分にはやってみたいと思うことが具体的ではないが漠然とあり，将来のキャリアについて鮮明に見ることができないことにもどかしさを感じていた。しかし，この講義を通して，今ははっきりと見えなくてもやりたいことの方向に進みながら，寄り道もしながら学んでいくことで見つけることができるのではないかと感じた。」

「今回のような現地の方と対話できる講義はとても貴重で私自身幅広い知識をつけるために重要なものである。」

「社会的不利な立場にいる人に対しての，保健指導や母子保健，診療の提供をしていて，日本には見られない取り組みを行っているところに感動しました。日本の医療だけを見るのではなく世界に視点を置くことはとても勉強になるなと感じました。タイ研修にとてもいきたかったので，今日の講義をとても楽しみにしていました。貴重なお時間ありがとうございました！」

学生からの反応としては以上のようなものがあった。

またHSFからは，海外研修が中止になってタイ側としても残念に思っていること，名桜大学の海外研修がもたらす効果として，交流によって自分たちにも刺激があること，遠い日本の人から関心を示してもらっているということが地域住民にとってエンパワーされることを，講義のなかで聞くことが出来た。

Ⅳ．考察

本来，teamsのようなオンライン会議ツールは，参加者が場所を選ばず様々な場から参加し会話することが可能なものだ。その意味では，遠隔で講義を受ける学生が大学のみならず，県内，県外，国外にいる相手から講義を聞くという形は特別なことではない。しかし，これまで距離があったことによって簡単にはつくれなかった出会い，話を聞き，意見交換するという機会が，以前よりも持てるようになっている。遠隔で教育を受ける効果については様々な評価が行われているが，大学と学生を繋ぐだけではなく，大学を通して海外にいる人と学生を繋ぐ授業が実践されるということは，学生にとって授業に参加する選択肢が増え，学びの多様性が得られるのではないかと考える。

海外研修による学生の学びについては，横川ら（2017）

による報告で，「課題を改善するためには，相手の置かれているその背景を理解することの必要性に気づくことができた。学生は，国際看護の実際を学べたことが自信につながったようである」と述べられている。この国際看護の実際という部分において，今回のICT活用による講義がどのように効果があるのか考えたい。

今回の講義では，現地に行かずともNGOスタッフと対話が出来る形で，NGOが行っている支援について直接教えてもらうことが出来た。学生が，日本と違う医療制度，異なる文化的政治的背景を持つなかで行うヘルスケアを知ることが出来たことについて，「社会的不利な立場にいる人に対しての保健指導や母子保健，診療の提供をしていて，日本には見られない取り組みを行っているところに感動した。日本の医療だけを見るのではなく世界に視点を置くことはとても勉強になる」，「現地の方と対話できる講義はとても貴重」と振り返っている。これは，実際に健康課題に対するサポートを必要としている対象者が学生の見る画面の向こうに現実にいて，その取り組みがなされている実際を，学生が受け止めることが出来たのではないかと推測する。ここに，海外研修において対面で対象者に出会うことに近い感覚を持ち得ていると考える。

そしてこの学びの過程を，教員も含む第三者が介入して伝えるのではなく海外の現場で活動する相手に直接話を聞いたことによって，海外研修に行って受けるインパクトと非常に近い意味を持つと推測できた。

コロナ・パンデミックによってヒトの移動が制限され，密を避けるために対面し触れ合うような交流が困難な状況にあるなか，国際保健の課題として，自国の枠を超えて世界が力を合わせて解決しなければならない問題が，今まで以上に遠い問題として置かれてしまう懸念がある。特にマイノリティが置かれる立場は，一層光が当たりにくいことが予想される。そのため，世界が抱える保健課題，その対象者と文化的背景について，知ること，理解すること，行動につなげることをより模索していくことが求められる。国際看護学の講義はそのことを学ぶ場であるが，HSFは社会的に不利な立場にある人々をヘルスサポートの対象にしており，HSFの活動を知ることは国際保健に目を向け課題を考えることに加え，サポートに手が届きにくい人の存在と状況を学ぶことにもつながっている。このことから，対象となる海外にいる人との距離が出来ている現状であっても，ICTの活用により学生自身に，世界と日本とのつながり，世界の健康課題と国外の地域におけるヘルスサポートについて，身近に引き寄せて考えることが可能となった意味も持つ，と考える。

また，スタディツアーを行うNGOが以前から提言していたことでもあり，恵泉女学園大学人間社会学部（2008）でも報告されている通り，現地に学びに行く側には多くの得るものがあるが，それに対して現地受け入れ側の得るものはあるのか，両者は対等な関係で交流が出来ているのか，という課題がある。しかし，今回のようにICTを活用し講義を行うことで，現地の滞在での受け入れ側の負荷が減っている可能性も考えられる。そして，完全に対等かと言えばそうは言えなくとも，同じ場に身を置き，実際に会って会話をし，同じ時を過ごして交流をすること，日本からの一方的な知識を押し付けるのではなく逆に現地で行っていることを日本から来た学生が学んでいるといること自体が，現地受け入れ側にとっては得るものとして，大きなインパクトになっているのではないかという推察が出来る。実際に，交流によってタイ側としても刺激があること，遠い日本の人から関心を示してもらっているということが，地域住民にとってエンパワーされるということは，実際に講義のなかでHSFより聞くことが出来た意見でもある。お互いに交流し学びあえる関係性をつくり続けていくことが今後も重視される。

V．今後の課題

ICT活用での授業により，海外のNGOの活動を通して国際看護の実際として学ぶことができたが，以下のような課題も残る。

① 現地に行ったからこそ得られる気づきがコンビニエントに享受できてしまうことで，自ら海外研修に参加して学ぶという意識が薄くなる。

② 現地を訪問し活動に参加するからこそ得られること，特に海外の地域の人々と対面しコミュニケーションを取ることによる気づきが得られない。

VI．おわりに

今回のICT活用によるHSFとの協働による講義の効果については，学生からの所感による反応から考察しており，課題は残る。更に報告を積み重ねていくことで，今後の研究につなげていきたい。

そして，講義を協働で行ってもらったHSFについては，海外研修では万全の受け入れ態勢を整え，学生に多くの学びをもたらしてくれているが，今回はオンライン会議ツールを使ってNGO活動の共有を行うという，新たな取り組みに協力してもらった。タイ王国内のマイノリティに置かれる対象者へのケア，生活向上，教育や権利獲得のために，活動できることには常にチャレンジするHSFの姿勢は，わたしたちも多いに学ぶところであ

り，改めて感謝したい。

また今回の授業をスムーズに実施できたことは，準備段階から講義に至るまでの本学MNCの協力体制が大きい。アドバイスとサポートをいただいた保守員仲間涼氏にお礼を申し上げたい。

国際看護学Ⅰを受講したことによって視野が広がったということと，対象者の背景を知り寄り添うことの重要性を知ったということ，世界の広がりを実感することができ学ぶということの凄さや素晴らしさを感じたという学生の声は，今回の授業を受講したことが有意義であったということが反映されていると考える。今後も，コロナ・パンデミックの状況が変化するなか，対面講義とともにICTを利用しながら教育を行っていく状況において，国際看護学の授業においても学生の学びの広がり・深まりにつながるように更に多方面から検討していきたい。

Ⅶ. 引用・参考文献

・金井優子，横川裕美子（2017）「平成28年度看護学科における国際看護学Ⅱの海外研修(タイ王国)報告」『名桜大学紀要』第22号，107-110

・久保宣子・山野内靖子・蛭田由美（2019）「看護系大学生の国際看護活動に関する関心や期待―国際看護学教育の実態調査との比較からの考察―」『八戸学院大学紀要』第58号，163-171

・恵泉女学園大学　人間社会学部（2008）『国際シンポジウム「海外体験学習における受入側のインパクト」報告書』https://www.keisen.ac.jp/about/activity/gp/study/

・スタディツアー研究会（2000）「スタディツアーにおける現地受け入れ側インパクトの考察～国際理解教育の視点から」

・佐久本功達（2019）「遠隔教育システムの研究」『研究コラム（つながる、つなげる教員の輪）』https://www.meio-u.ac.jp/research/column/2019/12/005931/